

## 『農耕詩』第2歌における「接ぎ木」と「多様性」

高橋 宏幸

### はじめに

ウェルギリウス『農耕詩』第2歌について考察する本稿の出発点は二つある。その一つは第2歌の「第2」の含意、もう一つは第2歌の構成と内容の両面から観察される「接ぎ木」の意義である。

「第2歌」に関して、最近、Henkelはそこに文学論的暗示が込められていることを論じ、「本」ないし歌の「巻(*liber*)」が第2歌の主題である「樹木」の「樹皮(*liber*)」と通じることを糸口として、樹木栽培に詩作が重ね合わせて表現されていることを述べた<sup>1</sup>。本稿も「第2歌」に比喩的表現が盛り込まれていると見る点は同じだが、「歌」よりもむしろ「第2(*alter*)」に着目する。というのも、すぐあとに確認するように、「第2」は『アエネーイス』において「次代」への「継承」の意義を含んで用いられ、この意義が「ローマ建国」という主題と密接に関係して重要であるからである。加えて、「継承」には「つなぐ」というイメージの点で「接ぎ木」との類縁性を見ることができる。

接ぎ木については、異種間の樹木の結合から果実が生まれることが自然に反した異様な事象として否定的に見られていた<sup>2</sup>が、その見方は、これも最近、Loweによって説得的に反駁された。Loweは、ウェルギリウス以前の作家では、接ぎ木がごく普通に行なわれる栽培法としてその表象は価値判断をとまなわかったこと、そこに『農耕詩』第2歌では不可能を実現するような理想(ないし空想)的側面が描き込まれたこと、そして、その側面はウェルギリウス以後の作家に影響を残したことを論じた<sup>3</sup>。このように接ぎ木の表象を肯定的に捉える議論を進めて、本稿はそれを第2歌全体の文脈に照らして検討する。第2歌には内容と構成の面で他の歌にはない特色が見られる。内容面では、樹木の種類の多様性である。たしかに、重要な樹木はブドウとオリーブであり、オリーブのほうが世話いらざであるため、記述の多くはブドウに費やされる。けれども、この二

<sup>1</sup> Henkel, J., Vergil Talks Technique: Metapoetic Arboriculture in *Georgics* 2. *Vergilius* 60 (2014), 33-66. 文学論的暗示という点では、cf. also Pucci, J., *The Full-Knowing Reader: Allusion and the Power of the Reader in the Western Literary Tradition*. Yale 1998, 99-108, Clément-Tarantino, S., La poétique romaine comme hybridation féconde. Les leçons de la greffe (Virgile, *Géorgiques*, 2, 9-82). *Interférences - Ars Scribendi* 4 (2006), 1-26. [http://ars-scribendi.ens-lyon.fr/IMG/pdf/Clement\\_Tarantino.pdf](http://ars-scribendi.ens-lyon.fr/IMG/pdf/Clement_Tarantino.pdf).

<sup>2</sup> Ross, D. O., Non sua poma: Varro, Virgil and Grafting. *ICS* 5 (1980), 63-71, id., *Virgil's Elements; Physics and Poetry in the Georgics*. Princeton 1987, 104-109, Thomas, R. F., Prose into Poetry. Tradition nad Meaning in Virgil's *Georgics*. *HSCP* 91 (1987), 244-246, id., Tree Violation and Ambivalence in Virgil. *TAPhA* 118 (1988), 271-272,

<sup>3</sup> Lowe, D., The Symbolic Value of Grafting in Ancient Rome. *TAPhA* 140 (2010), 461-488.

つ自体に多数の品種が名前を挙げられる他に、無数とも言える種類の果樹への言及があり、この対象の多様性は第1歌の「穀物」、第3歌の「牧畜」、第4歌の「養蜂」の場合と異なるものであるように思われる。ところが、接ぎ木を行なうためには異なる種類の樹木を必要とし、そこに関連が予想される。構成面では、ある話題に別の話題が頻繁に挿入されることが注目される。顕著なのは、イタリア讃歌、春の讃歌、農民讃歌と呼ばれる個所で、これらに類するものは他の歌に見られず、第2歌に集中している。こうした「挿入」が、言ってみれば、話題と話題を接ぎ木するものであると見なすことにそれほどの飛躍はないであろう。そこで、以下には、これを「接ぎ木構成」と呼ぶことにする。

こうした着眼から、本稿は第2歌に見られる「継承」、「多様性」に留意しながら、接ぎ木に関わる表現を検討し、そこに人種、民族、地域、時代を異にする人々のあいだでの「協働」のモデルが暗示されているという解釈を提起してみたい。

## 序歌の提示

まず、第2歌の主題について序歌の提示を見てみよう。

Hactenus aruorum cultus et sidera caeli:

nunc te, Bacche, canam, nec non siluestria tecum

uirgulta et prolem tarde crescentis oliuae.

huc, pater o Linaeae: tuis hic omnia plena  
muneribus, tibi pampineo grauidus autumnno

floret ager, spumat plenis uindemia labris;

huc, pater o Linaeae, ueni, nudataque musto

tinge nouo mecum dereptis crura coturnis.

(G. 2.1-8)

ここまでは耕地の手入れと天の星辰についてだったが、

いまは、バックスよ、あなたを歌おう。あなたとともに森の

茂みと、育ちの遅いオリーブの苗も歌おう。

おいでください、父神レーナイオスよ、この世のすべてを満たしてあなたの

恵みはあり、あなたのためにずっしりと重いブドウの総りで

野が華やぎ、獲れたブドウの汁が桶を満たして泡立つ。

おいでください、父神レーナイオスよ、ここで絞らたての果汁に

私とともに裸足を浸してください。サンダルは脱いでください。

ここでまず留意したいのは、波線下線部、第1行が第1歌に語られたことを振り返ったあと、第2行から実質的な第2歌の序歌が始まっており、「ここまで」から「いま」へ、

第1歌を引き継ぐ第2歌の作品中に占める位置が強調されていることである。このことは上に触れた「第2」が示唆しうる「継承」の含意と共鳴するように思われる。

次いで目に留まるのは、靈感を与える神格としてバックススが呼びかけられることに呼応して、大部分——上の引用中、下線を付していない部分——がブドウ栽培に関わることである。このことは、第2歌が「樹木栽培」を主題としながらも、さまざまな樹木の中でブドウがもっとも重要であることを提示しているように見える。実際、ブドウがブドウ酒の原料としてオリーブ油の原料となるオリーブの実と並んで最重要である一方、オリーブ栽培にかかる手間が少ないのに対してブドウ栽培にはさまざまな細心の注意が必要であることから、この提示はごく自然にも思える。しかし、それは、オリーブは言うまでもなく、その他の樹木を軽視してよいということを意味していない。実際、二重下線部、「森の茂み」については、ブドウに劣らず、一緒に(*nec non, tecum* 2)歌うことが提示されている。加えて、*silvestria uirgulta* の2語が行跨ぎに置かれていることにも注意すべきかもしれない。というのも、第1-2行が第1歌から第2歌への引き継ぎを表現しているとすると、この行跨ぎはそれとの類縁性を感じさせる。行から行への移行が「森の木々」に重ね合わせて表現されることは、そうした引き継ぎや移行が喚起する「継承」をそれらの木々が象徴的に含意することを提示するようにも思われるからである。

以上に見たところをまとめると、序歌には、ブドウが語られる対象として大きな意味をもつ一方で、「第2」が次へ引き継ぐという含意をもって表現され、この含意がブドウとオリーブ以外のさまざまな樹木と関連づけられていることが提示されている。次には、「第2」について検討する。

## 「第2」の含意

『アエネーイス』において「ローマ建国」と密接に関連した「第2」(*alter*)の意義には大きく分けて三つの面があるように思われる。その一つは、ローマを「第2」のトロイアとして捉える場合である。アエネーアースは、トロイアを逃れてデーロス島に着いたとき、アポッロン神に

*da propriam, Thymbraee, domum; da moenia fessis*

*et genus et mansuram urbem; serua altera Troiae*

*Pergama, reliquias Danaum atque immitis Achilli.*

(A. 3.85-87)

授けたまえ、テュンプラの神よ、われらの家を。疲れた者に城市と

民族と永続する都を授けたまえ。守りたまえ、トロイアの第2の

ペルガマを、ダナイー人と無慈悲なアキッレースから生き残った者たちを。

と祈った。トロイア人であるアエネーアースにとって、祖国を失い、異国の地に新たな

国を求めるとすれば、その新天地を第 2 の祖国と考えることは自然である。この点で、「ローマ建国」という作品の主題はトロイアの再興という一面をもつことになる。しかし、アエネーアースの祈りとは裏腹にトロイア再興は実現しない。第 12 歌におけるユピテルとユーノーのあいだの取引によって、アエネーアースの子孫がイタリアに地歩を築くとしても、トロイアの名前は消え去ることが定められるからである<sup>4</sup>。従って、この含意は、皮肉なことながら、アエネーアース以後には意義を失うと言える。

二つ目の面は、戦争の繰り返し<sup>5</sup>を表現する場合には見られる。それは、一方で、アエネーアース率いるトロイア人とトゥルヌス率いるイタリア原住の民とのあいだの戦争を「第 2」のトロイア戦争として示すときに現われる。アエネーアースとラティーンヌス王のあいだに盟約が結ばれそうになったとき、これを見てユーノーは両者のあいだに戦争を起こすことを企み、

quin idem Veneri partus suus et Paris alter,  
funestaeque iterum recidiua in Pergama taedae. (A. 7.321-22)

そうだ、ウェヌスの産んだ子も それと同じく、もう一人のパリスとなる。  
息を吹き返したペルガマを またしても 燃やす葬儀の松明となるのだ。

という言葉をつく。その一方、この戦争の苦難についてウェヌスは神々の会議の場でユピテルに向かって、

muris iterum imminet hostis  
nascentis Troiae nec non exercitus alter,  
atque iterum in Teucros Aetolis surgit ab Arpis  
Tydides. (A. 10.26-29)

またも 敵が城壁を脅かしています。  
トロイアが再生しても、同じように また別の 軍隊が現われ、  
またも テウクリア人に対してアエトーリアのアルピーより立ち上がる  
テューデウスの子がいます。

---

<sup>4</sup> この「取引」とそれによって得られた「和解」について、高橋宏幸「ウェルギリウス『アエネーイス』後半における苦難の終わり」と始まり」、松下知紀・池上忠広編『Anglo-Saxon 語の敬称と変容』専修大学出版局、2009、131-134 を参照。Cf. also Feeney, D. C., *The Reconciliations of Juno*. *CQ* 34 (1984), 179-194.

<sup>5</sup> 作品後半で「繰り返し」が重要なテーマをなしていることについて、cf. Quint, D., *Repetition and Ideology in the Aeneid*. In Hardie, P. (ed.), *Virgil. Critical Assessment of Classical Authors*. Vol. III, 117-157, esp., 133-152.

と嘆いた。他方、そのような「繰り返し」はこの戦争自体についても表現される。一度はトゥルヌスとの一騎打ちによって戦争に終止符が打たれると思ったのも束の間、誓約の場がユートルナの策略によって蹂躪され、再び両軍入り乱れての戦いとなったあと、ラティーン王の城下へ攻め寄せたアエネーアースについて、

testaturque deos iterum se ad proelia cogi,

bis iam Italos hostis, haec altera foedera rumpi. (A. 12.581-82)

神々を証人として言う、またしても自分は戦いを余儀なくされ、  
すでに二度もイタリア人を敵とした、盟約破棄もこれが二度目だ、と。

と語られる。ここには、戦いが一つ終わったと思っても、つねに次の戦いが起き、その苦難が果てしなく続くことが表現されている。

このように終わりのない苦難を克服して「ローマ建国」を実現することは——あとに立ち戻ってより詳しく触れるように——、どれほど傑出した人物でも、一人の人間には不可能であり、何世代にもわたって事業が継承されなければならない。各世代の結節点でその都度、あとを継ぐ次の人間が必要になる。これが「第2」の三つ目の面である。実際、メルクリウスはアエネーアースをディードーのもとから去るよう促す勧告の中で、次のように、英雄の使命がアスカニウス・イウルスに引き継がれねばならないことを告げる。

Ascanium surgentem et spes heredis Iuli

respice, cui regnum Italiae Romanaque tellus

debetur.' (A. 4.274-76)

伸びゆくアスカニウスと跡継ぎたろうとするイウルスの希望とを  
顧みよ。イタリアの王国とローマの大地とは彼の手に  
帰すべきなのだ。

また、トゥルヌスとの一騎討ちに臨むアエネーアースのそばに立ったイウルスについて、

Ascanius, magnae spes altera Romae

(A. 12.168)

偉大なローマの第2の希望たるアスカニウス

と表現される。さらには、アエネーアースやイウルスのあとを引き継ぐべく、再び生を享けて地上に上る日を冥界で待つローマの英雄たちの霊についてアンキーセースは

animae, quibus altera fato  
corpora debentur, Lethaei ad fluminis undam  
securos latices et longa obliuia potant. (A. 6.713-15)

この霊たちは、運命により、もう一つの  
肉体を授かる定めであるゆえ、レーターの川波のもとへ行き、  
懊悩を漱ぐ水と長い間の忘却を飲むのだ。

と語る。たしかに、ここでの「もう一つ」は「継承」を直接的には意味していない。けれども、まず、「もう一つの肉体」が行跨ぎという次に連なる行構成によって「継続」の表象に与っていることに注意したい。また、アエネーアースは靈魂が崇高であるのに対して肉体が鈍重である(sublimis animas iterumque ad tarda reuert/ corpora A. 6.720f.)とし、アンキーセースは精神の働きを肉体が鈍らせ、阻害することを述べ、肉体を「牢獄の暗闇」(tenebris et carcere caeco 6.734)に喩える。そのように肉体が精神にとって苦難の原因であるとすると、ローマの英雄たちはそうした苦難を運命づけられていることがここで語られていることになる。それが「ローマ建国」にともなう苦難であることは明らかである一方、「もう一つの」と言われることは、少なくとも、そこに「繰り返し」の含意を見ることが出来る。

さて、以上の「第2」の含意のうち、二つ目と三つ目の面については、『農耕詩』第2歌にもその現われを見ることが出来る。まず、第2歌のもっとも重要な課題であるブドウ栽培について、

Est etiam ille labor curandis uitibus alter,  
cui numquam exhausti satis est: namque omne quotannis  
terque quaterque solum scindendum glaebaque uersis  
aeternum frangenda bidentibus, omne leuandum  
fronde nemus. redit agricolis labor actus in orbem. (G. 2.397-401)

ブドウ栽培の苦勞は他にもまだあり、  
十分に尽くされることは決してない。というのも、毎年、すべての  
土壤に三度四度と鋤を入れねばならない。土塊を絶えず  
砕くため鋤で撞かねばならない。葉の繁みを  
どこもすかねばならない。農夫の苦勞はすんだあとにまためぐって戻る。

と語られ、その苦勞がいつまでも終わりを見ないこと、つねに次の苦勞がめぐってくる  
ことが示される。一つの苦勞をすませたと思っても、そのあとに必ず「第2」の苦勞が

待っていることが表現されている。

その一方、接ぎ木については

et saepe alterius ramos impune uidemus  
uertere in alterius, mutataque insita mala  
ferre pirum et prunis lapidosa rubescere corna. (G. 2.32-34)

私たちがよく見るように、損失を蒙らずに一つの木の枝が  
別の木の枝に変わることがある。接ぎ木による変化がリンゴを  
ナシの木に実らせ、スモモの木に石粒を含むヤマグミが赤く色づく。

と述べられる。果実の結実という樹木栽培の目的が一つの樹木からもう一つ別の樹木に  
引き継がれる点で、接ぎ木には「使命の引き継ぎ」という「第2」の含意の三つ目の面  
が見て取れる。

以上、『アエネーイス』における「第2」の含意を確認し、それが『農耕詩』第2歌に  
おいて、「労苦」という作品の枢要をなすモチーフ、および、接ぎ木についての表現に現  
われていることを見た。次には、第2歌の「接ぎ木構成」について見る。

### 「接ぎ木構成」

第2歌の構成はほぼ次のように整理できる（「接ぎ木」に一重下線、「多様性」に関わ  
るところに二重下線を付した）。

1-8 序歌

9-135 多様な樹木生育

9-21 自生種（地形，種子，根株により種々）

22-34 育て方（種々：吸枝，株，接ぎ木等）

35-46 呼びかけ→農夫，マエケーナース（第2の序歌） (i1)

47-72 労働の必要：樹木の種類に応じ異なる生育法（接ぎ木，取り木，挿し木等）

73-82 接ぎ木・目接ぎ

83-108 樹木の品種の多様性

109-258 多様な土地の性質・見分け

109-135 樹木ごとに適した土地：世界各地でそれぞれの樹木

136-176 イタリア讃歌 (i2)

177-225 土地の性質（痩せ地，沃地，牧草地，耕地，開墾地，不毛地，万能地）

226-258 土質と見分け方（濃密，まばら，塩気，肥沃，湿り気，重軽，寒冷）

259-457 栽培法

259-419 ブドウ栽培

- 259-72 下準備 273-87 植樹区画 288-97 畝の深さ 298-314 禁止事項  
 315-45 植付時期：最適＝春 (319-345 春の讃歌 (i3))  
 346-96 植付後の世話：施肥，排水，土，支え(346-61)，成長段階ごと(358-70)，防備  
 (畜害，冷害) (371-96) (380-96 山羊→バックスへの犠牲，バックス讃 (i4))  
 397-419 ブドウ栽培の労苦  
 420-425 オリーブ  
 426-432 果樹  
 433-453 その他の樹木：それぞれの有用性  
 454-457 ブドウ酒の弊害  
 458-540 農民讃歌 (475-89 詩人の願望：(1)自然哲学，(2)田園生活 (i5))  
 541-42 結び

こうして概観すると，第2歌の構成面での特色が二つ気づかれる．一つは挿入を多用する構成，つまり，本稿で「接ぎ木構成」と呼ぶものである．主題である樹木とは直接的な関係の薄い話題が第2歌を通じて挿入されるが，上には，それを(i1)～(i5)として示した．とくに，イタリア讃歌，春の讃歌，農民讃歌は「逸脱(digression)」とも呼ばれる一方，それぞれが作品の中でよく知られた個所をなし，それだけで独立した内容をもつものが異質な文脈に組み入れられた印象を与えている．注意したいのは，これら「逸脱」が第2歌に集中していて，他の歌には見られないということである．その理由が何かについてはこれまで問題にされたこともほとんどなかったように思われる．しかし，これらを「挿入」と考えると，第2歌に扱われる接ぎ木との類比が気づかれる．実際，ラテン語では「挿入する」と「接ぎ木する」はともに *insero* である<sup>6</sup>．

もう一つは，主要な樹木であるブドウとオリーブから始めるのではなく，それを後半にまわし，前半(9-258)は主として樹木の多様性についての記述にあてられることである．このことは序歌の提示とかみ合わない面があるように思われる．というのも，上に見たように，序歌はバックスに呼びかけて靈感を乞い，ブドウを歌うことを第2歌の主要な課題として提示しているので，この提示のあとではブドウから語り始めることがきわめて自然であったと思われるからである．その前に，樹木の多様性が語られることは，一方で，上にも触れたように，このテーマの重要性を示唆するものと考えられる．他方，この樹木の多様性についての個所は，序歌でのブドウの提示と後半でのブドウについての記述のあいだにあることに留意すると，それ自体が全体として一つの大きな挿入をなしていると見なすことができるかもしれない．

<sup>6</sup> もちろん，これは同じ単語が二つの意味をもつということではなく，二つの異なる単語(*in + sero* 「連ねる」と *in + sero* 「植える」)が現在時制においては同形になるということである．Cf. Clément-Tarantino, art. cit.(n.1), 7.

以上、第2歌の構成を観察したところからは、それを「接ぎ木構成」と呼ぶことが的外れではないことがあらためて示されたと思われる。では、接ぎ木、および、樹木の多様性についての記述にはどのような意義が込められているのか。これを次に検討する。

## 接ぎ木と多様性

Nec modus inserere atque oculos imponere simplex.

nam qua se medio tridunt de cortice gemmae

et tenuis rumpunt tunicas, angustus in ipso

fit nodo sinus; huc aliena ex arbore germen

includunt udoque docent inolescere libro.

aut rursum enodes trunci resecantur, et alte

finditur in solidum cuneis uia, deinde feraces

plantae immittuntur: nec longum tempus, et ingens

exiit ad caelum ramis felicibus arbos,

miratastque nouas frondes et non sua poma.

(G. 2.73-82)

接ぎ木と芽接ぎの方法は単一ではない。

一方は、樹皮の中から芽が膨らんで、

薄い被膜から破り出るとき、膨らんで瘤になったところに

細い裂け目ができるので、そこに 異なる種類の木の芽を

差し込み、湿潤な樹皮の中で育つように仕込む。

ひるがえって他方は、瘤のない幹を切り開く。深く

芯まで楔を入れて裂け目を作り、それから 多産な

若枝を差し入れる。長くはかからず、巨大な姿を

天に向かって聳える木が実り豊かな枝を広げつつ、

新たに目にした枝葉と自分とは異なる実に驚く。

接ぎ木は種類の異なる樹木を結び合わせることでよりよい果実生産を試みる栽培方法である。従って、当然のことながら、種類が少なければ結合の可能性が限られ、一種類の樹木で行なうことは不可能である。この点で、まず、引用個所の最初に「方法は単一ではない(non modus simplex)」と言われる表現が注目される。それは、表向き、接ぎ木と芽接ぎという二つの方法の相違を述べるものではあるものの、modusは「様式」、「種類」をも意味するので、これだけを取り出せば、「一元的ではない」あるいは「ただ一種類ではない」という含意を見ることができ、「多様性」を暗示しているように思われるからである。そのうえで、そうした多様な樹木の異種間結合が成長する力を与え(docent inolescere 77, feraces plantae immittuntur 79-80), それが驚くほど実り豊かな収穫をもたらす

ことが強調される(*ingens exit ad caelum ramis felicibus arbos, miratataeque nouas frondes et non sua poma.* 80-82). こうした表現からは、接ぎ木が樹木の多様性と、多様性から生まれる豊穡を象徴する技術として提示されていることが見て取れるように思われる。

実際、接ぎ木の記述に続いて、樹木の多様性について語られるとき、その最初には、

*praeterea genus haud unum nec fortibus ulmis  
nec salici lotoque neque Idaeis cyparissis,  
nec pingues unam in faciem nascuntur oliuae,* (G. 2.83-85)

さらに、種類がただ一つでないのは丈夫なニレも、  
ヤナギも、エノキも、イダの糸杉も変わらず、  
たわわに実るオリーブも 形は一つではない。

というように、接ぎ木について言われた「一種類ではない」という言辭が繰り返され、そこに関連づけが意図されていることを窺わせる。そして、オリーブ、ナシ、ブドウについてさまざま品種名の列挙(86-102)がなされたあと、その締めくくりには、

*sed neque quam multae species nec nomina quae sint  
est numerus, neque enim numero comprehendere refert;  
quem qui scire uelit, Libyci uelit aequoris idem  
dicere quam multae Zephyro turbentur harenae  
aut, ubi nauigiis uiolentior incidit Eurus,  
nosse quot Ionii ueniant ad litora fluctus.* (G. 2.103-08)

だが、種類はかぎりなく多く、どのような名前があるか  
数えられず、数え尽くそうとしても意味はない。

それを知りたいと思うのは、リビュアの原野で  
西風に巻き上げられる 砂塵がどれだけ多いか数える、  
あるいは、東風がひとときわ激しく船に吹きつけるとき、  
どれほどの数の波浪がイーオニアの岸に寄せるか知ろうとするのと同じだ。

というように、それらが「無数」であることが強調される。

この「無数」という表象はさらに次の土地の性質の多様性とその見分け方を述べる箇所(109-258)に引き継がれる。そこではまず、世界全体に目を向けてそれぞれの地域に特有の樹木が育つことが述べられる。そのことは次の引用に端的に表れる。

*aspice et extremis domitum cultoribus orbem*

Eoasque domos Arabum pictosque Gelonos:

diuisae arboribus patriae, sola India nigrum

fert hebenum, solis est turea uirga Sabaeis.

quid tibi ... referam ...

extremi sinus orbis, ubi aera uincere summum

arboris haud ullae iactu potuere sagittae?

(G. 2.114-118, 123-124)

世界に目を向けよ。最果ての地まで耕作者に征服されている。

アラブの民が住む東方の地も、入れ墨した ゲローニー人の地も。

樹木にはそれぞれ異なる原産地がある。ただ インドだけが黒い

黒檀を産し、サバエイ人の土地だけに乳香の枝が伸びる。

どうして語る必要があろう、・・・

世界の最果ての秘境には、梢が天を摩す

樹木があり、矢を射かけても届かぬ高さであることを。

具体的な民族名を挙げながら、「世界の最果て」を強調し、そのいたるところで樹木栽培が行なわれ、それぞれに異なる種類の樹木があることが示されている。

このあと、イタリア讃歌(136-176)をあいだにはさみ、土地の性質について述べられる(177-225)。この個所での特色として、オリーブ栽培の適地(179-183)、ブドウ栽培の適地(184-194)の他に、牧畜の適地(195-202)、穀物栽培の適地(203-211)、さらには、それらのいずれにも適した土地(216-225)について語られる、つまり、第2歌の主題である樹木にとどまらず、第1歌、第3歌で語られてもよかった事柄が取り込まれていることが認められる。この点では、農耕にはまったく役に立たない土地について言及するとき(212-215)、養蜂にも適さないことが述べられ、第4歌に関わることも組み入れられている。このことは、一方で、他の歌の話題があいだに入っているという点で、それぞれ一種の挿入と見なすことができるかもしれない。そうだとすれば、これらは「接ぎ木構成」に与るものであると考えられる。他方、樹木に限定せずに土地の性質を語ることは、それだけ土地の多様性を強く印象づけようとするものであるように思われる。実際、この個所の最初には、

nunc locus aruorum ingeniis, quae robora cuique

quis color et quae sit rebus natura ferendis.

(G. 2.178-179)

今度は土地の性質を語る番だ。それぞれどんな強み、

どんな色、作物を育むどんな自然の力があるか語ろう。

と言われ、人間に多様な個性があるように、土地にもそれぞれ個性があること(ingeniis,

cuique), また, 「作物を育む」(rebus ferendis)というように, 栽培対象を樹木に特定せず  
に広く提示していることが認められる。

以上, 「接ぎ木」が「多様性」と深い関わりをもって表現されていることを見てきた。  
では, なぜ詩人は「多様性」をこれほど重視するのだろうか。その一つの答えは,

nec uero terrae ferre omnes omnia possunt. (G. 2.109)

だが, すべての大地がすべてを生み出せるわけではない。

という, 土地の性質を述べる個所の最初の詩行から引き出せるかもしれない。黄金時代  
については,

ipsaque tellus

omnia liberius nullo poscente ferebat. (G. 1.127-128)

大地がみずから,

誰も求めずとも, すべてをふんだんに生み出していた。

と言われていた<sup>7</sup>。それとは異なり, 鉄の時代には, 単に労働が必要であるだけでなく,  
一つの土地だけで働いても, すべての産品をそろえることはできないことが上の詩行に  
は示されている。このことは, しかし, 逆の見方をすれば, すべての大地が一つに連なり,  
各地の産物を共有することができれば, 「すべてを生み出せる」というのと実質的に  
変わらない状況が実現されうることを表現しているとも解せる。そうだとすると, 一つ  
の共同体の有する多様性の豊かさはそのままその共同体の豊かさであるということになる。

この点で, 樹木の多様性を述べる個所と土地の多様性を述べる個所のあいだに挿入さ  
れるイタリア讃歌(136-176)の中にも関連していると思われる詩句が見出せる。詩人はま  
ず, 他の土地と比べてイタリアが豊饒であることを述べ(136-154), そのあと, 次のよう  
に, イタリアにはたくさんの町が築かれていることを称える。

adde tot egregias urbes operumque laborem,

tot congesta manu praeruptis oppida saxis

fluminaque antiquos subterlabentia muros. (G. 2.155-157)

加えて, あれほど数多くのすぐれた都, 労苦を注いだ建物がある。

<sup>7</sup> 同様の表現について, 『牧歌』4.39 (omnis feret omnia tellus)も参照。モデルとされたヘーシオドス『仕事と日』117-118が「豊かさ」(ζειδιωρος... πολλόν τε και ἄφθονον)を強調するのに対し, ウェルギリウスは「すべて」にポイントを置いている。

あれほど数多くの町々が切り立つ岩山の上に 人の手 で築かれ、  
由緒ある城壁の下を滑って川が流れる。

ここで注意すべきは、そうした町の建設を成し遂げたものとして人間の労苦(laborem 155, manu 156)が強調されていることであろう。そこからは、農民の労苦が注がれる土地の豊かさが町の数の多さに重ね合わされていることを見て取ることができ、この「多数」には「多様性」との共鳴が窺われる。実際、この引用に続いては、イタリアを囲む海とイタリアの湖水の列挙(158-164)、および、水の表象(riuos 165, uenis, fluxit 166)を引き継ぐ鉱脈の列挙(165-166)によって「多様性」のイメージが喚起される。そして、そのあとイタリア讃歌は次のように締めくくられる。

haec genus acre uirum, Marsos pubemque Sabellam  
adsuetumque malo Ligurem Voluscosque uerutos  
extulit, haec Decios, Marios magnosque Camillos,  
Scipiades duos bello et te, maxime Caesar,  
qui nunc extremis Asiae iam uictor in oris  
imbellem auertis Romanis arcibus Indum.  
salue, magna parens frugum, Saturnia tellus,  
magna uirum: tibi res antiquae laudis et artem  
ingredior, sanctos ausus recludere fontis,  
Ascraeumque cano Romana per oppida carmen. (G. 2.167-176)

この地は熱血漢を輩出した。マルシー人、サベッリーの若武者、  
苦難に慣れつこのリグリア人、投げ槍上手のウォルスキー人を  
生んだ。この地はデキウス氏、マリウス氏、偉大なカミッルス家、  
スキープオー家の屈強な戦士たち、誰よりも偉大なカエサルを生んだ。  
カエサルはいまアジアの 最果ての地 にいる。すでに勝利を収め、  
戦争を望まぬインド人をローマの城塞から遠ざけている。  
ご機嫌よう、作物の偉大な母、サートウルヌスの大地よ、  
勇士らの偉大な母よ。 あなたのために、いにしえより称えられた主題と技術に  
私は取りかかる。神聖な泉を開くことに挑戦し、  
アスクラの歌を ローマの町々に 歌い広める。

全体としては戦いに強い人間を輩出したことが述べられているものの、構成要素として多様な民、さまざまな家系の人々が数え上げられる。その中でとりわけ注目されるのは、カエサルがいま「最果ての地」(extremis oris 171)で勝利を手にした、と言われることであ

る。上に見たように、樹木の多様性は世界の「最果て」(extremis domitum cultoribus orbem 114, extremi sinus orbis 123)まで各地に固有の種類が育つことをもって表現されていた。その最果てまでカエサルが掌中に収めたとすれば、その統治の下に世界中の土地が一つに連なったことになる<sup>8</sup>。しかるに、上に見たところでは、鉄の時代であるいま、すべての土地がすべてを生み出せるわけではない一方、世界が一つになって各地のさまざまな固有の産品を共有できるなら、大地がすべてを生み出していた黄金時代と実質的に変わらないことになると解された。カエサルへの言及の直後に置かれた「作物の偉大な母、サートゥルヌスの大地よ、勇士らの偉大な母よ」という呼びかけはこの理解にそうものであると考えられる。サートゥルヌス神が君臨した時代が黄金時代であるから、かつて黄金時代に生み出したと同じようにいま大地は、自身が生んだカエサルをはじめとする勇士たちの働きによって最果てまで一つに連なり、すべての作物を生み出そうとしている、といった含意が示唆されているように思われるからである。

さて、このような理解に妥当性があるとするれば、そこからはまず、共同体の豊かさはそれを構成する人々の多様性に由来する、ということが導き出されると思われる。豊かさを生む産品の多様性はそれらを生み出せる土地の多様性に由来する一方、それぞれの土地が産品を生むためにはそこに住んで土地を熟知した民の労働を必要とするので、土地の多様性は土地に生きる人々の多様性と重なるからである。そのうえで、そのように豊かさの土台に人々の多様性が考えられるとすると、そこには世界各地の土地という地理的側面とともに、人々が世代を越えて労働の営みを引き継ぐ点で歴史的側面があることが認められる。実際、イタリア讃歌からの引用箇所にも、歴代のローマの指導者を輩出した家名が列挙され、カエサルはその人々の築き上げたものの頂点に位置づけられている。そして、そうした「継承」の側面が上に述べた「第2」の含意と共鳴することはほぼ間違いないように思われる。次には、ローマの建国以来の発展は傑出した異なる才能をもつ指導者が代々現われることで支えられてきたという歴史観があったことを確認したうえで、それに連なる表現を『農耕詩』第2歌の中に観察し、その意義を検討する。

### e pluribus unum<sup>9</sup>

キケロー『国家について』第2巻においては、小スキューピオーがカトーから聞いた話として、国としてローマのすぐれる理由が、他の国では法律や制度を築いた創建者がほぼ一人であるのに対し、「ローマの国制は才能あるただ一人の人間ではなく、多数の才子

<sup>8</sup> ブリーニウス『博物誌』12.111には、大ポンペイウス以来、ローマでは樹木をも凱旋行列に連ねた、という記述がある。これを重視すれば、世界中の樹木をローマに集めることは全世界をローマの版図に収めることを象徴するものと考えられる。

<sup>9</sup> このラテン語はアメリカ合衆国の硬貨に多民族国家を表すモットーとして刻印された。その含意をここで借用するが、この意味での古典期の用例は伝わっていない。

によって、また、一人の人間の生涯のあいだではなく、時代を重ね、幾世代を経て築かれた。実際、これまで存在したどんな才能ある人間でも、何一つ気づかぬものがないというほどではなかったし、才能ある人々がこぞって一つに結集して先の備えをしようとしても一時にできることは限られる。すべてに対処するには実地の試行と時の経過を要する」(nostra autem res publica non unius esset ingenio, sed multorum, nec una hominis vita, sed aliquot constituta saeculis et aetatibus. Nam neque ullum ingenium tantum extitisse dicebat, ut, quem res nulla fugeret, quisquam aliquando fuisset, neque cuncta ingenia conlata in unum tantum posse uno tempore providere, ut omnia complecterentur sine rerum usu ac vetustate. Cic. *Rep.* 2.2) と語られた。

このように、国家が永続的発展を期するとき、各時代状況に応じた対処をなしうる才能を備えた人物がその都度現われてそれぞれの貢献をする必要があるという考え方はリーウィウスに受け継がれた。それは、マイルズが指摘したように<sup>10</sup>、リーウィウスの歴史書にはローマの「建国者」(conditor)と呼ばれる人物が何人も登場することに顕著に表れる。建都の王ロームルスのみならず、武力により建設された都を正義と法律と道徳により新たに建設し直した第2代の王ヌマ・ポンピリウス(1.19.1)、市民のあいだに階級制度を創始した第6代の王セルウィウス(1.42.4)、ローマの自由を創建したブルトゥス(8.34.3)、ローマの法体系を確立したアッピウス・クラウディウス(3.58.2)、ローマをガッリア人の占領から解放して第2の建国者と呼ばれたカミルス(5.49.7)、そして、すべての神殿の建立者もしくは再興者であるアウグストゥス(4.20.7)というように、各人各様に「建国」の事業達成のための役割を果たした点で「建国者」とされた。

同様の考え方をウェルギリウスも共有していたことは、「第2」の含意」の項でも多少触れたが、なにより『アエネーイス』第6歌の「ローマの英雄のカタログ」に明瞭に現れる。アンキーセースはアエネーアースにアルバの王統を辿って示し、ロームルスまで至ったあと、ユーリウス・カエサルとアウグストゥスに息子の目を向けさせる。

hanc aspice gentem  
 Romanosque tuos. hic Caesar et omnis Iuli  
 progenies magnum caeli uentura sub axem.  
 hic uir, hic est, tibi quem promitti saepius audis,  
 Augustus Caesar, diui genus, aurea condet  
 saecula qui rursus Latio regnata per arua  
 Saturno quondam, super et Garamantes Indos  
 proferet imperium;

(A. 6.788-795)

<sup>10</sup> Miles, G B., *Livy: Reconstructing Early Rome*. Ithaca NY 1995, 88f.

見よ、この一族を。

おまえに連なるローマ人だ。こちらがカエサルで、みなイウールの血を引き、大いなる天の蒼穹のもとへ行く定めだ。

この勇士、こちらこそ、おまえが何度も約束を耳にしている  
アウグストゥス・カエサルだ。神の子にして、築き上げるは黄金の世紀の復活、これをラティウムに、かつてサートゥルヌスが統治した田野に取り戻す。また、ガラマンテス人やインド人の領域を越えて覇権を伸長する。

すぐに気づくのは、系譜の連なり、黄金時代を連想させる統治、領土の伸長など、内容面でも表現上も、上に引いたイタリア讃歌でのアウグストゥスへの言及箇所との類似で、そこからは少なくとも、これらに共通の文脈があることが見て取れる。このあと、かつてない広さの版図についての強調(795-807)がなされたのに続き、そうした到達点への過程で貢献した「ローマの英雄たち」がそれぞれの名を知らしめた事績とともに列挙される(808-846)。

以上、国家の建設にあたっては世代を越えて各人各様の貢献が重要であるとする見方をキケロー、リーウィウス、『アエネーイス』について確認した。国家の建設という文脈から、当然のことながら、これらにおける「各人」は国の指導者である。それに対して、『農耕詩』第2歌では、農耕という文脈——つまり、第2歌の末尾に置かれた「農民讃歌」に端的に表れるような農民の生活に一つの理想像を見る文脈——から、農業生産に関わるすべてを視野に入れて、より広い層に目が向けられているように思われる。というのも、栽培法に関してブドウに多くの詩行を費やし(259-419)、オリーブ(420-425)とその他の果樹(426-433)に手短に触れたあと、詩人はそれら主要なもの以外の樹木もそれぞれに有用であることを語る。

quid maiora sequar? salices humilesque genistae,  
aut illae pecori frondem aut pastoribus umbram  
sufficiunt saepemque satis et pabula melli.

...

ipsae Caucasio steriles in uertice siluae,  
quas animosi Euri adsidue franguntque feruntque,  
dant alios aliae fetus, dant utile lignum

...

quid memorandum aequae Baccheia dona tulerunt? (G. 2.434-436, 440-42, 454)

なぜ 大事な木 ばかり私は歌うのか。ヤナギやつましいエニシダも、

それらがあれば、羊にやる葉っぱか、牧人が休む木陰には  
用が足りる。生垣やミツバチの餌にも十分だ。

・・・

カウカスの山稜に立つ実の生らない木々でさえ、  
東からの烈風に絶えず枝を折られ、持ち去られながら、  
それぞれがそれぞれの産品を与え、役に立つ木材を与える。

・・・

同等の讃辞に値するどんなものをバックスの賜物が生んだことがあるか。

ここではまず、エニシダに付された「つましい」ないし「低位の」(*humiles*)という語が、「より大きな(価値のある)木」(*maiora*)との対比において、これらの樹木について「価値が低いもの」という一般的イメージを示している。ところが、さまざまな樹木の種類を挙げながら、それぞれの木材の有用性を述べていった締めくくりには、それがブドウ酒も及ばないほどの価値を有すると語られる。この締めくくり自体、第2歌がブドウをもっとも重要な栽培対象としてきたことと著しい齟齬をなすように見えるが、それにとどまらず、このあとにはさらに、

**Bacchus et ad culpam causas dedit; ille furentis**

**Centauros leto domuit, Rhoecumque Pholumque**

**et magno Hylaeum Lapithis cratere minantem.**

(G. 2.455-457)

バックスは罪悪の原因にすらなつた。バックスのもたらす狂乱に駆られた  
ケンタウロスらは死によって平定された。ロイコスやポロスや  
ヒュライオスが大きな混酒器でラピタイ族に襲いかからんとしたときだ。

と続き、ブドウ酒が戦争の元凶をなした例が示される。このくだりはブドウ酒を否定的に表現しており、その不協和音は学者を悩ませてきた<sup>11</sup>。この点について、上に見てきた、個別のものでは限界があるゆえに、多様なもののそれぞれの貢献が重要である、そして、ここではとくにどんな小さな貢献も有益であることが述べられている文脈から理解が可能かもしれない。というのも、ブドウは「より大きな木」(*maiora*)の中でもっとも有用な樹木であるから、その木が害をなすと語ることには、「つましい」(*humiles*)とされるさまざまな樹木に有用性があるという言説を対比的に強調する意味合いが見取れるように思われるからである。一つの手がかりは『アエネーイス』第6歌の「ローマの英雄のカタログ」の中での内乱への言及に見出せる。そこでは、

<sup>11</sup> See Thomas, R. F., *Virgil: Georgics I-III*. Cambridge 1988, 242-243.

heu quantum inter se bellum, si lumina uitae  
attigerint, quantas acies stragemque ciebunt,  
aggeribus socer Alpinis atque arce Monoeci  
descendens, gener aduersis instructus Eois!  
ne, pueri, ne tanta animis adsuescite bella  
neu patriae ualidas in uiscera uertite uires;  
tuque prior, tu parce, genus qui ducis Olympo,  
proice tela manu, sanguis meus! --

(A. 6.828-835)

命の光を手にしたときには、ああ、なんという大戦争を、  
なんという衝突、大殺戮を引き起こすことか。  
舅がアルプスの堡壘とモノエクスの城塞から  
駆け下りると、婿は当方の軍勢を陣立てして対抗する。  
いかん、子らよ、このような大それた戦争を世の常と思うな。  
頑健な力を濫用して祖国のはらわたを抉るな。  
そなたがまず先に寛容を示せ、オリュンポスから血筋を引く身なのだから。  
武器を手から投げ捨てよ、わが血統よ。

というように、「神君」(diui A. 6.792)ユーリウス・カエサルがポンペイウスとのあいだに戦争を引き起こし、祖国に大きな損害を与えることが嘆かれる。ローマ建国に貢献した人々を多様な樹木に重ね合わせることができるのであれば、ブドウはカエサルのような指導者に比肩できるであろう。ポンペイウスに「大」(magnus)という副名がついたことを持ち出すまでもなく、戦争を引き起こすにはそれだけ大きな力を備えていなければならない。逆に言えば、大きな力を握る者には戦争を引き起こす危険性がある。こうした、与える貢献も多大である代わりに、ひとたび方向を誤ると蒙らせる損失も甚大となりうるといふ、大きな力の二面性がブドウに重ね合わせて表現されているのではないだろうか。

実際、『農耕詩』の中で一つのものに功罪ないし長所と短所が背中合わせに存在することを述べる例は他にも見られる。重要性ではブドウに引けを取らないオリーブについては、栽培法に関してブドウと対比して次のように語られる。

contra, non ulla est oleis cultura, ...  
ipsa satis tellus, cum dente recluditur unco,  
sufficit umorem et grauidas, cum uomere, fruges.  
hoc pinguem et placitam Paci nutritor oliuam.

(G. 2.420, 423-425)

それに対して、オリーブは世話いらすだ。・・・  
大地だけで十分だ。反った鋤で切り拓き、  
鋤を入れれば、水分が足りてたわわに実が生る。  
豊潤で平和女神お気に入りのおリーブはこうして育てるがよい。

表向きの対比は、労苦が尽きないブドウ栽培に対して、オリーブが世話をせずとも豊かに実る強い活力をもつ点にあるが、平和の象徴とされることへの言及もブドウ酒が戦争の原因となったと言われることと対照的である。そして、これら二つの点はオリーブの長所であると言える。けれども、そのオリーブも対処を誤ると災いをもたらす。

neue oleae siluestris insere truncos.  
nam saepe incautis pastoribus excidit ignis,  
qui furtim pingui primum sub cortice tectus  
robora comprehendit, frondesque elapsus in altas  
ingentem caelo sonitum dedit; inde secutus  
per ramos uictor perque alta cacumina regnat,  
et totum inuoluit flammis nemus et ruit atram  
ad caelum picea crassus caligine nubem,

...

infelix superat foliis oleaster amaris. (G. 2.303-309, 314)

また、野生のオリーブの幹を接ぎ木してはいけぬ。  
これまでよくあったことだが、不注意から牧人の落とした火が、  
最初こそ豊潤な樹皮の下に潜んで隠れているものの、  
木の芯に達するや、枝葉の先まで高く這い上がり、  
巨大な音を空に弾かせると、あとは広がるだけだ。  
枝づたい、高い梢づたい、勝ち誇った火の手が支配する。  
樹林全体を炎で包み、吐き出す真っ黒な  
煙は厚い雲のように漆黒の闇を空にかける。

・・・

あとに残るのは葉っぱも苦く因果な野生オリーブだけだ。

ここでは大火災に関して、接ぎ木を根本原因とし、牧人の不注意という偶然的要素を引き金に、オリーブの「豊潤」(pingui 305; cf. pinguem 425)、つまり、油脂分の多いことを被害拡大の要因としている。接ぎ木は、驚きをもって見られるほど(miratastque nouas frondes et non sua poma 82)よりよい果実を生む栽培法であり、上に見たところでは、多様

性から生まれる豊穡さを象徴している。オリーブもまた、「幹を切断しても、語るも不思議ながら、乾いて材木になったと見えるところからオリーブの根は生え出る」(caudicibus sectis (mirabile dictu)/ truditur e sicco radix oleagina ligno 30-31)というほど生命力が強い。そのように、それぞれはともに驚くほど生産性が高いにもかかわらず、二つの結びつきはさらに生産力を上げるのではなく、逆に大きな損失を生むとされている<sup>12</sup>。

さて、このように、有用性の高いものにも扱い方次第で災いの原因となりうる危険性が潜むとすれば、それは一方で、多様性の意義をさらに大きくするに思われる。というのも、同じ一つのものに偏るより、異なる多くのものを組み合わせて活用するほうが危険性回避の確率が高まることはほとんど自明であると考えられるからである。

他方、それと同時に、多様性そのものも危険性を内にはらむと言えるかもしれない。というのも、互いに異なるものは融和するより、反りが合わずに対立する、悪くすると、互いに傷つけあうことが多いと考えられるからである。実際、上に見た接ぎ木がオリーブに災いする場合はその一つの例示と解することができるように思われる。このことは、多様性が単に存在するだけでは必ずしも良い結果が生まれるとはかぎらず、多様性を作り出しているさまざまに異なる構成要素が同じ目的のために協働できたときはじめて成果が得られることを示していよう。

この点で、そのように、多様なものが協働するために、相互の相違克服という困難に直面するという構図が『アエネーイス』の作品構想の中心を占めることに注意しておく必要がある。後半に語られる「戦争」がもっとも激化したとき、詩人は

*tanton placuit concurrere motu,*

*Iuppiter, aeterna gentis in pace futuras?*

かくも激しく衝突させるのがよいと思われたのか、

ユピテルよ、これらの民はやがて永遠の平和を保つ定めであるのに。

と嘆いた。一つに結束するためにラティウムというほんの狭い範囲の中だけでこれだけの苦難を経験しなければならなかったとすれば、アウグストゥスの時代にローマが世界中の多様な民を取り込むことを見据えるとき、待ち受ける困難はその試みを不可能と思わせるほど大きいと考えられる。

この観点から、接ぎ木について言えば、そこには異種間の結合によって豊饒さをもたらす技術が提示されているとはいえ、その限界性も示されているように思われる。オリ

---

<sup>12</sup> また、『農耕詩』全体を通じて、作物を含めた生き物に関わる「固い」性質と「柔らかい」性質が対比的に描かれているが、これらのいずれにも有用ないし肯定的な側面と否定的な側面の両面が認められる。これについては、高橋宏幸「「固い種族」の技術と労苦——ウエルギリウス『農耕詩』——」、『農耕詩の諸変奏』英宝社、2008、31-61を参照。

ープに用いた場合の災いはそのことの端的な表現であろう。そもそも、接ぎ木ができる樹木の組み合わせは種類に近いものに限られる。異種間の結合と言っても、それは同じイタリアに住む民族間の統合に相当する程度とも見られる。それでも、そこから生み出される結果は賛嘆をもって迎えられる。このことは世界中の多様な民が平和裏に協働することの困難を暗示するものであるかもしれない。

## 結び

上には、「第2」の含意と「接ぎ木」の意義についての検討から、『農耕詩』第2歌において、多様なものが協働の輪を地理的にも歴史的にもつなぐことが豊かさをもたらすという理念が展開されていること、その一方で、その理念の実現には多大な困難があることも同時に暗示されていることを見てきた。

このような「協働」のモデルは、ウェルギリウス解釈においてよく口にされる「楽観的」または「悲観的」のいずれでもなく、現実的認識の上に立っているように思われる。その点で、この認識の出発点として「すべての大地がすべてを生み出せるわけではない」(G. 2.109)という詩句の重要性があらためて看取される。どれほど優秀で有力であっても、個が全体を完全に掌握することはできない。すべてを生み出そうとすれば、すべてがそれぞれ個別の性質に応じて力をついに結集する努力をたゆまず続けなければならない。そこで必要とされるのが「多様性」であり、異質なものを結び合わせる「接ぎ木」のような技術であり、「第2」に含意されるような、次代への営みの継承である。この観点からは、第2歌の特色をなす「讃歌」も、ただ讃美のみを歌うものではないと理解されるべきかもしれない。春は一年の、イタリアは世界の、農民は人間社会のそれぞれ「一部」にすぎないから、すべてをそろえているわけではない。そこに歌われる美点、利点、長所はそれぞれ他の季節、地域、共同体構成員との「協働」を通していつそう価値を高めるものと考えられる。それらが第2歌の中で「挿入」として組み入れられている、つまり、「接ぎ木構成」の軸をなしていることはそうした理解を後押しするように思われる。

## Abstract

### Grafting and Diversity in the Second Book of the *Georgics*

This paper considers 'grafting' (*insere*) and 'the second' (*alter*) as key terms in Book Two of the *Georgics* to present the ideal "*e pluribus unum*", the realization of which demands a miraculous unification of people with various backgrounds by surmounting their differences.

'The second' represents a first step, especially in the inclusive method of counting, toward a perpetual succession, as typically seen in the case of Iulus in the *Aeneid*. This

implication of the term has a link to 'grafting' in the sense of connecting one to the other, and appears in the proem of Book Two, which begins with recapitulating Book One before calling upon Bacchus, with the transition emphasized by *hactenus* and *nunc* at the heads of lines 1 and 2 respectively.

Trees, the subject of Book Two, are far more diverse in kinds (and so are the lands where they grow) than those of the other Books. Vergil emphasizes this diversity by placing it (2.9-258) before the passage about vine (2.259-396), which might have come right after the proem calling upon Bacchus, and it has a connection to 'grafting' in that (at least two) different kinds of trees are needed for it to be made. In fact, just as the mode of grafting and of budding is said to be not the one and same (*nec modus simplex* 2.73), so trees are said to be not single in kind (*genus haud unum* 2.83). Also, in Book Two we see a number of inserted passages, among which are the 'praises', features not appearing in the other Books, and even the section between the proem and the passage about vine, that is about the diversity of trees, could be regarded as an insertion. This insertion-heavy structure suggests the importance of 'grafting'.

Why diversity ? Whereas Earth of her own accord was producing everything in the Golden Age (1.127-128), in the Iron Age every land cannot produce everything (*nec uero terrae ferre omnes omnia possunt* 2.109), therefore it seems that to acquire all the products requires all the lands in the world to cooperate for the production. With this diversity at work as the ultimate goal to reach, lines 2.167-176 give an impression as if Augustus is on his way there, and, once the task is complete, the earth can be called Saturnian, as in the Golden Age. In this regard it might be helpful to take into consideration the thought that Rome is superior to other nations in that it has been founded by many different talents in many ages of men (Cic. *Rep.* 2.2), which is reflected in the Catalogue of the Heroes in Book Six of the *Aeneid*.

So, if a diversity of trees can be compared with that of talents which contribute to the founding of Rome, major trees (*maiora* 2.434) like vines and olives would represent great leaders, and at the same time, however, just as powerful men like Caesar and Pompeius in their confrontation brought about a horrible disaster (A. 6. 828-835), so wine is said to have been a cause of war (2.455-457), and if grafting, itself a productive method, is applied to wild olive, it could lead to a devastating wild fire (2.303-314). The more powerful, not just the more useful but the more dangerous when something goes wrong, and what matters is to build *e pluribus unum*, which is extremely difficult, since the more diverse a community, the more and deeper differences of its members to be surmounted.